

第15回 大賞(金の星賞)受賞作品

「めづ様」

岩手県立水沢高校二年 佐藤 礼菜



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

大賞 <金の星賞>

『めづ様』

岩手県立水沢高等学校二年 佐藤 礼菜あやな

「めづ様が、いらっしゃるんだって」

夏休み、お父さんの実家に向かうバスの中。小学五年生にして、初めての一人旅。お母さんに持たされた携帯電話からの声に、わたしはまばたきをした。

十歳年上のいとこのお姉ちゃん、千絵ちゃんからだ。

「めづ様？ おばあちゃんか、おじいちゃんの知り合いなの？」

窓から見える、山や田んぼの緑がとってもきれい。目に優しい光景を眺めつつ、電話の声に耳を傾ける。道が悪く、バスが揺れるたび、電話の声が少し遠くなる。わたしは膝に乗せていたリュックを押さえた。

「うん、おじいちゃん達、今朝から一週間くらいいないでしょ。だから、その間は私達だけでおもてなししなさい、って。調べている途中なんだけど、村の神様みたい」

おばあちゃんの家の辺りには昔話や伝説があつて、千絵ちゃんはそれを調べにおばあちゃんの家に泊まりに来ている。大学で神様について調べているからか、何だか楽しそう。たしか村の神様についてレポートを書くとか言っていた。おばあちゃんやおじいちゃんにちょっととした話を聞くことはあったけれど、眞面目に調べるのは初めてだし。千絵ちゃんに言われて着替えの他に自由研究の宿題を持つてきたのは、正解だったみたい。

おばあちゃん達は今、遠い親戚のおじいちゃんが百歳で死んでしまって、お葬式に呼ばれている。だから、家には千絵ちゃんとわたしの二人だけだ。そこにもう一人、知らない人が来ると思うと、緊張する。神様って言うけれど、どんな感じなんだろう。

バス停に着くと、歩いて五分くらいのところにおばあちゃんの家がある。茶色い瓦屋根に、古めかしいガラス戸。玄関前の石造りの足場からは、少し土っぽい匂いがする。大好きな、なつかしい感じのする匂い。





汗をぬぐつて戸を叩くと、千絵ちゃんが出迎えてくれた。明るい茶色の髪に、赤いジャージがよく似合う。顔を合わせた瞬間、千絵ちゃんの猫みたいな目が細くなつた。

「かんなちゃん、ひさしぶり！」

戸口で千絵ちゃんに抱きつかれる。フワツと、シャンプーの良いにおいがした。会うのはお正月以来だ。

「お迎えする準備は終わつてゐるし、夜の八時からいらつしやるらしいから、それまでは自由だよ。あ、自由研究持つてきたよね？ 調べたとこまで教えてあげる」

靴を脱ぎながら、千絵ちゃんが笑つた。わたしも入ろうとすると、後ろから声がかかる。近所のおばちゃんがたくさん野菜が入つたかごをかかえて立っていた。

「これ、ここいらの畑でとれた野菜。みんなで持ち寄つたんだよ。めづ様によろしくねえ」

ずつしりとしたかごを渡される。千絵ちゃんとお礼を言うと、おばちゃんはにこにこして帰つていった。どうやらめづ様はかなりの人気者みたい。居間に上がつてから、千絵ちゃんがノートと絵本を見させてくれた。おじいちゃんやおばあちゃんだけでなく、村の人にも聞いたんだとか。絵本を見てみると、少し黄ばんだ紙に、着物姿で狐のお面をつけた人の絵が描かれていた。「めづ様は村の守り神なんだって。村のいろんな行事に出てるみたい」

絵本をめくると、昔、神様が天からこの村にやつてきて、村で流行つていた病気を治したという話から始まつていた。その後、神様から力を分けられた家の人人が代々神様の代わり——めづ様として村を守つてゐる。他のページには、めづ様が村のお祭りや行事に参加してしたり、村の人と仲良くしてゐる絵がたくさんあつた。お盆の話もある。その家の『先祖様』と話して、一緒に家に幸せを招くみたい。普段は神社にいるらしいから、あんまり知らなかつたのはそのせいかも。

ただ、わたしは少し不安だつた。千絵ちゃんは嬉しそうに話すけれど、わたしは人見知りをする。知らない人と七日間も一緒にいるなんて、なんだか気が遠くなりそう。めづ様専用の部屋が用意されているらしいけれど、食事と寝る時以外は一緒だし。そもそも、どういう人が分からぬ。千絵ちゃん

の説明を聞きつつ、わたしは必死に気をまぎらわせていた。おばあちゃん達が早く帰つてこないかな、と思いながら。

いくら不安に思つても、時間はやつてくる。夜八時。二人で作ったカレーを楽しんで、片付けを終わらせた少し後。^{はと}鳩時計の鳩が飛び出すのと同時に、玄関の戸を叩く音がした。その音に、びくりと背中がはねる。千絵ちゃんが「ちょっと待つて」と言つて、居間を出していく。にぎやかなテレビの音が気になつてテレビを消すと、部屋は気まずいくらい静かになつた。玄関の方から、千絵ちゃんの声が聞こえる。廊下を歩く足音と話し声が、段々近づいてくる。つい手を握りしめると、ガラッと居間の戸が開いた。

「どうも、こんばんは」

男の人にしては高く、女人にしては低い声。入ってきた那人を見て、わたしは思わず悲鳴をあげそうになつた。あわてて口に手を当てる。那人一めづ様は、^{きつね}狐のお面をつけていた。絵本では見ていたけれど、実際に見たらやつぱり驚いてしまつた。

「めづ様。こつちがかんな、わたしと同じ、この家の孫です」

千絵ちゃんが紹介する。わたしはおじぎをするのがやつとだつた。めづ様がうなづく。

「もしかして、驚かせてしまつたかい？」「めんね、この格好がしきたりなんだよ」

少し困つたように言う。そのまま鼻を搔くと思つたのか、顔に手を伸ばした。お面に気付いて、「おっと」と手を下ろす。肩をすくめる仕草がお茶目で、なんだか力がぬけてしまつた。あんまり怖い人じやなさそうで、少しほつとする。

「……こんばんは。よろしくお願ひします」

小さくあいさつすると、「樂にしていいんだよ」と返された。男の人が着るような藍色の着物に、首元には水色のスカーフ。肩くらいまでの髪を後ろで一つに結んでいて、女人なのか、男人なのかよく分からぬ。千絵ちゃんにこそつと聞いても、うーん、と腕を組んだままで。不思議に思つていると、肩を叩かれた。ふいに視界に入つてきた狐のお面に、また驚いてしまう。

ふわり、とお線香の香りが鼻をかすめた。

「えっと……なんですか？」

めづ様が、お面を指差す。

「男に見えるかい？ 女に見えるかい？」

会話が聞こえていたのかな。顔がカツツと熱くなるのを感じた。

「うーん、と……女人の人？」

めづ様は背が高いけれど、色白だし髪もとつてもきれいだ。小さな声でやつと言うと、めづ様が笑つた。

「それじゃ、わたしは女だ」

からかうような口調。めづ様の言葉に、千絵ちゃんがへえつ、と小さく声を上げた。

「神様って、男の人か女人の人かはつきりしていることが多いんだけど……珍しいな」

「伝説でも、はつきりしていないんだ。わたしも初めて聞いた時は、不思議に思ったよ」

やつぱり耳がいいみたいで、めづ様がそれに答える。千絵ちゃんが少し顔を赤くした。

「興味を持つてくれるのは、とても嬉しいことさ。なんでも気軽に聞いてくれ。あ、でも、水菓子を出してもらえたし、それこそ私ははりきつてしまつたな」

めづ様が笑う。「水菓子つて？」と千絵ちゃんの服を引っ張ると、「果物のことだよ」と小声で教えてくれた。

次の日から、めづ様との生活が始まった。朝早くに起きて、夜は部屋でご先祖様へお祈りをする。家から出ることはできない決まりだけれど、家の中では好きにしていいみたい。千絵ちゃんが料理を作つてわたしはそれを手伝う。食事もめづ様の好みに合わせて和食と果物が多くなつた。食事もお風呂もめづ様が先だから、自然と行動が早くなる。おかげで、宿題の生活の記録はお手本みたいに健康的になつた。縁側で千絵ちゃんと一緒に伝説を教えてもらえるのも楽しい。とはいっても、わたしは千絵ちゃんと違つてあんまりお話できないから、聞いていることがほとんどだけれど。





そんな生活も四日目で、めづ様自身のお話になつた。わたしが自由研究用のノートにメモしていると、めづ様が口を開いた。

「かんなは何か聞きたいこと、あるかい？」

急に声をかけられて、わたしは驚いた。話は、めづ様がお正月の朝早くに行われるお祭りに出たところだ。少し考えて、わたしは思い切って口を開いた。

「……めづ様は、それだけ仕事が多くて大変でしょう？　いやにならないの？」

わたしの質問に、めづ様は「そうだねえ」とつぶやいた。

「村の本当の神様の名前は、アキサネカミっていうんだけどね、漢字をこう

書くんだ」

千絵ちゃんにペンを借りて、さういふとノートに書いてみせる。そこには、きれいな字で「愛護神」と書かれていた。

「愛するものを護る。めづ様って名前も、最初の愛の字をとつてあるんだ。昔の言葉で、愛するという意味でね。私はこの名前が大好きなんだよ」

そう言つう声は、とても優しい。少し意外だった。めづ様はいつもどこかおどけた雰囲気があつたけれど、今は一切そういうのを感じない。「だから」とめづ様は続けた。

「だから、大変つていうのはあんまり気にならないんだ。この村も、神様も、私は大好きだからね。大好きなもののためなら、いくらでもがんばれるのさ」「めづ様がそう言つと、気持ちいい風が吹いて、庭の木や花が嬉しそうに揺れた。村もめづ様が大好きみたい。頭をなでてくれる手は大きくて温かくて、むず痒い感じがした。

「めづ様、ありがとう。すごく良いお話を聞かせてもらつちゃつた」

何だか恥ずかしくて、うつむきながらお礼を言つ。でも、めづ様は何も言わなかつた。不思議に思つて顔を上げると、狐のお面は庭を見ていた。どうしたの、と首をかしげる。

「めづ様ね、照れてるんだよ」

いたずらっぽく千絵ちゃんが笑う。そこで黒電話が鳴つた。めづ様が「ほら、早く出なさい」とあせつたように言つ。千絵ちゃんは「うう」と、笑いをこらえぎれていない。

「もしもし、かんなちゃん？」

電話に出ると、おばあちゃんの声がした。久しぶりに聞いた声に、ほっとする。

「うん、そうだよ。久しぶり、おばあちゃん。どうしたの？」
わたしの言葉に、千絵ちゃんが笑うのを止めた。眞面目な顔をしてそばにやって来る。

「あのね、明日の夜帰ることになったのよ。大切な用事があるって言ったら、分かってくれてねえ。おもてなし、一人だけで大変だったでしょ？」

最後の日は、おばあちゃん達と一緒におもてなししようね。そう云うおばあちゃんの声は、穏やかで柔らかい。「気をつけて帰ってきてね」と云つて電話を切ると、わたしは千絵ちゃんに笑いかけた。

「おばあちゃん達、明日帰つてくるって！」

千絵ちゃんの顔が明るくなる。二人でハイタッチをした。めづ様が「良かつたじゃないか」と腕を組む。わたしは大きくなづいた。

次の日の夕方。夕飯を持って、二人で居間に行くと、めづ様はテレビを観ていた。紫の着物を着た女人が、演歌を歌つていて。めづ様が楽しそうに、歌に合わせて体を揺らす。何だかこきげんだ。それはめづ様だけじゃないけれど。きっと、もう少ししたらおばあちゃん達は帰つてくる。力強い歌声を聴きながらテーブルに夕飯を置いた。めづ様と同じ、でも少しだけ冷めた野菜の天ぷら。麦茶も持ってきて、千絵ちゃんと「いただきます」をしようとした時、テレビの画面が急に変わった。めづ様の動きが、ぴたりと止まる。青い画面に、アナウンサーの男の人気が紙を見ながら、ニュースを話す。どうやら、県境で土砂崩れが起きたみたい。場所は、むずかしい漢字で書かれていてよく分からぬ。千絵ちゃんを見ると、真っ青な顔で食い入るように画面を見つめていた。「千絵ちゃん？」と声をかけると、ハツとしたようにうつむく。

「ちょっとおばあちゃん達に電話かけるね」

そう言って、居間を出て行く。めづ様を見ると、分からぬみたいで首をかしげられた。もしかして、といいやな予感が頭をよぎる。戻ってきた千絵ちゃんの顔は、暗い。

「ねえ、もしかして、おばあちゃん達……」





わたしがおそるおそるたずねると、千絵ちゃんがうなづいた。さつき土砂崩れが起きた場所はおばあちゃん達の帰り道で、電話をかけてもつながらなかつたとか。「大丈夫だとは思うけど」という千絵ちゃんの声は、やつぱり、暗い。ここまで落ち込んでいるのを見るのは初めてで、急に不安になつてくる。重い、気まずい空気が流れた。ふいに、パンッと手を叩く音が響く。めづ様だ。

「お祈りをしよう」

静かな声。わたしは目を丸くした。一拍置いて、千絵ちゃんが声を上げる。「お祈りって、めづ様がいつもしている?」

「そう、そのお祈り。私の部屋でね」

でも、と言いかける千絵ちゃんに、めづ様は優しいけれど、力強い口調で言う。

「信じることが大事なんだ。不安なのは分かるけれど、それをこらえて気持ちを強く持つことが、ね。でないと不安が他の人にもうつってしまうから」そう言って、めづ様がわたしを見た。千絵ちゃんが目を見開く。少しして、うなづいた。

「……分かった。でも、おばあちゃん達が帰ってきた時のために、私はここにいる。かんなちゃん、……お願いね」

千絵ちゃんの目は、まっすぐで優しい。わたしはうなづくと、めづ様の手をにぎって居間を出た。

めづ様の部屋は、階段を上つて二階にある。急な階段をずんずん上るその手は、大きくて、すべすべしていて、温かい。不思議な気持ちになりながら、転ばないようについていく。一番奥のふすまの前で、めづ様が立ち止まつた。初めて入る、特別な部屋。めづ様が、

「ここに入つたら、おばあちゃん達が無事に帰つてくるということを、とにかく強く思つてほしい」

と言つて、菊の花が描かれたふすまに手をかけた。開いた先に、わたしは目を疑つた。

不思議な空間だつた。真っ暗な夜空みたいな中に、青や緑や黄色やピンクといった小さな螢みたいな光が、ふわふわと飛んでいる。床があるのかも分からないし、明らかに普通の部屋じゃない。わたしがめづ様の手を強くにぎ



ると、「行こう」と声をかけられる。怖くて、足が震える。なんとか一步踏み出すと、水たまりを踏んだみたいに、ひとりと足音が鳴った。でも、足がぬれた感触はない。怖いような、なつかしいような気分になる。わたしは必死におばあちゃん達のことを考えた。近くを飛んでいた黄色い光が、まるでおじいちゃんと並んでいた時みたいで、手を伸ばすと少し温かい。そして、すぐふわりと逃げていってしまう。どこまで続くのか分からぬ空間に、声をかけようとした時、めづ様がくるりと振り返った。

「お祈りをする時は、お面を外さなければいけないんだ。だから、私がいいというまで目を閉じていてくれ」

怖いけれど、言われた通り目を閉じる。何の音もしなくて、めづ様の手の温かさだけが伝わってくる。

「……めづ様？」

つい声を出すると、笑ったような音の後、よく聞きなれた柔らかな声が降つてきた。

「かんなちゃん、えらかったわねえ。千絵ちゃんと一人で、よくがんばったのね」

思わず開けそうになつた目を、温かい手にふさがれる。どうしてここにいるの、と聞くと、柔らかい声が笑つた。

「かんなちゃん、もう少しだけ、待つていてくれる？」

わたしは一瞬迷つた。本当は怖いし、すぐにでもおばあちゃん達に会いたい。でも……。

大好きだから、だからこそ、がまんしなきや。わたしは泣きそうになるのをこらえて、半ば叫ぶように返事をした。

「大丈夫だよ、おばあちゃん達が帰つてくるまで、千絵ちゃんとめづ様と一緒に三人で待つてるからー。留守番くらい、まかせてよー。」

「そう、えらいわねえ。よろしくね」

わたしの返事に、おばあちゃんが笑つた。その後、田をふさいでいた温もりが離される。めづ様が、「もういいよ」と言つた。ゆっくり田を開けると、畠が目に入る。水色の灯りの提灯に、きゅうりの馬とナスの牛、果物が飾ら

れたお仏壇。畳の匂いとお線香がふわりと香る和室に、わたしは田をこすつた。

わたしがさつきの」とを叫おつとすると、めづ様は狐のお面の口元に指を当てた。

「さ、もう戻ろう。千絵が待ってる」

聞きたいことや言いたいことはたくさんあつたけれど、わたしはだまつてうなづいた。でも、階段を下りる途中で一つだけ、わたしはどうしても聞きたいことをたずねた。

「ねえ、めづ様」

「なんだい？」

「めづ様とアキサネカミ様は、仲がいいの？　お祈りのことも、不思議だつたし……」

わたしの質問に、めづ様が首をかしげる。

「どうだろう。私は大好きだけれど、神様の考えている」とまでは分からないな

でも、とめづ様は続けた。

「私と愛護神様が仲良しに見えたのなら、それは私が愛護神様を信じているからかもしれないね。どう思われているかよりも、自分がどう思うかが大切だから。それに、いざという時、心の助けになるのが神様だからね」

分かるような、分からぬような話。わたしが考え込むと、めづ様が苦笑いした。

「ようするに、神様だったり、おばあちゃん達のことだったり、何かを信じることでかんな達の不安が少しでもよくなれば、それが一番ってことだよ」「……じゃあ、わたしと千絵ちゃんの神様はめづ様だね。すゞく、ほげまされたから」

わたしが小さく笑うと、めづ様はきょとんとしたように固まつて、それから頭をかいた。

居間に入ろうとするとき、千絵ちゃんが出てきた。泣きそうな表情でいて、笑っている。

賢治のまちから

高校生☆讀書大賞



「良かった、声をかけようと思つてたところなの。さつき電話があつてね、おばあちゃん達、もう少しで帰つてくるつて！ ……一人のお祈りが通じたからかもね」

どうやら、土砂崩れが起きたのは通つた後だつたみたい。そのせいか電波の状況が悪くて、電話がつながらなかつたとか。その話に、わたしはほつとした。でも、それはただ安心しただけじゃなくて、最初から分かつていたことが本当になつたみたいな、不思議な安心だつた。力が抜けて、なんだか笑えてくる。めづ様を見ると、ふつと笑つたような気がした。千絵ちゃんも笑つてゐる。三人で笑いあつていると、ちょうど、庭のほうから車の音がした。二人分の足音とともに、よく聞きなれた声がする。

顔を見合わせて、それから、わたしたちは一緒に玄関へと向かつた。